

Aria on The Middle of Ahead

壊れかけ自動書記

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠山・キンジとはある事故で唯一の肉親である兄を失い、そしてその敬愛していた兄をマスコミに避難され、武偵を辞めようとしていた。

だが遠山・キンジにいた多くの友人たちによって立ち直り、そしてあの事故の真相を追い、自分の正義とは何かを見つけるために歩き出した。

*この作品はAheadシリーズの終わりのクロニクル、GENESISシリーズの境界線上のホライゾン・そしてこのSSのメインタイトルである緋弾のアリアのクロスオーバー作品となっております。

目次

第一章 朝起きし武偵達

1

第二章 演説せし悪役

18

第一章 朝起きし武偵達

「通りませー通りませー」

東京武偵高校女子寮から少し歩いた所にある廃ビル群の中でも高いビルに彼女はいた。

長い銀色の髪は朝に吹くそよ風に揺らぎ、銀色は朝日を反射し煌めく。

顔の肌色は女性らしい白色に近い肌色だが、肩から腕まではまるでカーボンが覆っているかのように黒色だ。

廃ビルに住み着いた燕が鳴き出し、翔び立つ。バサバサ、バサバサと。

燕は彼女の前を横切り、彼女の青色の瞳に朝日をバツクに映り込む。それでも彼女は驚いたような顔をせず、歌を歌い続ける。

廃ビル群の近くには少し広めの墓地があり、朝、墓参りに来た人たちは「また歌っているのか」と思い、その歌に耳を傾ける。まるで墓に眠る死者たちを弔う鎮魂歌のように穏やかなその歌、通し道歌は静かな朝に響く。

「我が中こわきのとおしかなー」

そして彼女は歌い終わる。すると途端にそよ風よりも少し強い風が吹き、髪を揺ら

す。

「P-O-I-S、ホライゾン・アリアダスト、動作確認終わります」

そう彼女、ホライゾン・アリアダストは言い、廃ビルを後にした。

第1章 朝起きし武偵達 配点 立ち向かう勇氣

彼女、ホライゾン・アリアダストは現住まいである東京武偵高校女子寮の一室に帰ってきていた。現在、時刻は午前六時を回る頃、まだ初春なため、朝日は出たばかりで、そこまで明るくはない。

「今日から二学期ですか……」そう彼女は眩き、ため息をつく。

彼女の所属はSSR科、つまるところ超能力を持った武偵が所属する科だが、彼女は現在、SSR科は最低限の授業にしか出ておらず、強襲科、つまるところ敵の鎮圧が目的の前衛部隊に所属する科を主に受けていた。

本人も正直に言えばSSR科よりも強襲科の方が圧倒的に楽しいという節もある。だが強襲科も強襲科で武偵高校の中では大概の科なのだ。

「まあもう死ねを挨拶代わりに言われるのも慣れましたけど」

挨拶代わりに死ねという声が飛び交う学科、そこが強襲科だ。実際、卒業率は九十七%とアメリカ高よりは低いものの死亡率が存在する学科だ。この日本ではまともとは言えない学科であろう。

「キンジ様は大丈夫でしょうか？ 強襲科に放り込んだおかげで大丈夫でしょうけど、まあアウトだったら骨の欠片くらいは拾っておきましょう」

そう言いながらもホライゾンなりに友人である遠山キンジのことを心配する。少し前に起きた事故で一時的に塞ぎこんでしまった彼を助けることは自分だけではできなかった。そう、他の友人たちがいなければ。

様と付けるのはホライゾンの特徴であり、決して遠山キンジに対して尊敬とか、そういった感情は存在しない。

口では散々なことを言っではいるがホライゾンなりに心配しているのだ。自分だけでは救えなかったが多数数の手で絶望という沼から引きずり出され彼を。いくら救えたとはいえまだ脆いと言える彼を。

そんなことを口にしながらもホライゾンは武偵高校の制服を着始めた。

現在、時刻は7時頃、遠山・キンジは起床した。

どうやら作業中に寝てしまったようで、ソファに横たわっていた。机の上には整備がほぼ終わっている遠山の愛銃であるキンジスペシャルと友人たちで撮った写真が置いてあった。十人は軽く超える規模の大所帯が写っており、まるでクラスの集合写真み

たいだった。

その写真を見ていると兄の事故直後のことをキンジは思い出した。

とある船の事故で遠山は兄を失い、そしてそのことを御門違いなはずなのにマスコミは兄を責めた。それも必要以上に。

そのせいで遠山は「武偵とは報われないロクでもない仕事だ。いつそやめてしまおう」とその時は考えていた。

遠山の目標である兄を失い、それを尚且つ大勢から非難されたのだから仕方のないことだとも言える。

だが友人たちが遠山から言えば馬鹿共が救いの支えになってくれたのだ。その時の会話を状況を遠山ははつきりと覚えていた。――もしかしたら友人たちがいなければあのまま自堕落な生活を送っていたかもしれないのだから。

その時のことを遠山は思い出す。

「まあ事故で貴様の兄が失われたことは悲しいことだな。ああそれが新庄君だったら私は立ち直れる気はしないな。――だがそれでも立ち直れ。歯を食いしばって地面を這い、泥水を啜っても。

それが貴様が貴様の兄に対してできることだ。遠山、お前、武偵として兄を尊敬していたのだろう。ならばそれに並ぶくらいになれ。なつて汚名を返上するくらいはして

みろ。

それともあの事故で貴様の兄のついて調べてろ。調べて、調べて、真実を曝けさせろ。その先に何かがあるのかは私にも分からん。ーだがそれでも追い続ける。そうすれば前に言ったように汚名を返上できるかもしれないし、犯人を捕まえることすらできるかもしれない。もしかしたら貴様の兄が生きているということさえありえるな。この二つのうち、一つでもできないのなら貴様は兄のことを悔やむ資格すらない」

そう髪オールバックに、一部が白髪になっている彼ー佐山・御言は言った。いつもは隣にいる新庄・運切を過剰に愛でる変態だったが、今回ばかりは遠山・キンジを友人として立ち直らせようとしている。口は悪いが。

最後の辺りの言葉に遠山・キンジはピクリと反応する。死んでいた死者が息を吹き返すかのよう。

「生きているだと…？兄さんが」

「あくまでも可能性の一つだがね。私はあくまでも〈尋問科〉所属だが私は世界で最も聡明な男だ。だからこそあの事故は不可解な点しか見つからない。私はそんなこととしているよりも新庄君を愛でる方が優先的だ。世界の真理だね。だからこそこの事故、いや事件は貴様が解くといい。私からはこれくらいだ」

佐山が言い終わるとキンジは「あの事件をそんなことだと…。」と死にそうな眼で殺氣

を佐山に向ける。

だが隣に立っている青髪の少女、新庄・運切は宥めるように言う。

「確かに佐山君は基本的に頭が可笑しくて変態で口が悪いけど、遠山君のことを心配して言っているのは確かなことだから。それが僕には分かるよ。素直に言えないのは佐山君らしいしね」

「ふむ… 私が素直ではないと。それはないよ新庄君。こうして新庄君の尻を愛でていいんじゃないか」

そう言いながらも佐山は新庄の尻を触り始める。

「それとこれは別!!？」と新庄はどこから取り出したのか新庄のメイン装備であるE X—S tで佐山の頭を殴りつける。メキツと何が折れる音がして、佐山は地面に倒れ伏すが数秒後に復帰する。

その光景を武偵高校の制服を派手に改造した物を着ている男はケラケラも笑う。そして笑い終わると真剣な顔をして言う。

「俺も結構前にキンジ、お前と同じようになった。事故でホライゾンと俺が轢かれて、帰ってきたのは俺だけで、その時の喪失感たらなかつたぜ。でもよ、俺はねーちゃんに教えて貰ったんだ。その時、いなくなっちゃったホライゾンが失った物を、いや人が生まれてから失ったり奪われたりする生き方をしろと。」

俺はそんな時も、そして今も馬鹿だから深くは分からねえけど、それでも今、キンジ、お前は大切な何かを失おうとしている。それだけは俺には分かる。だから俺は取り返したい。俺の考えはそれだけだ。俺、イー葵・トリーはここにいるから頼れよ」

そう言つて派手に改造した制服を着た男子、葵・トリーは遠山・キンジに手を差し出した。

シヤランと制服についている鈴が鳴り、軽やかな音色を立てる。

「珍しくトリー様がまともなことを言つてますね。今日は馬鹿でも降つてくるのでしようか？」

「ふむ、出雲並みの馬鹿の貴様がそこまで考えているとは、何かIAI製の試作品でも食べたか？」

「佐山君、葵君が確かに出雲君、いや佐山君並みなのは事実だけどそれを面と向かつて言うのはどうかと思うよ。あとIAI製の試作品に関しては否定できないかな。」

そう言いながら新庄は苦笑する。

IAIとは出雲航空技研という大企業で、日本でも有数の規模を誇っている。だが最近のラインナップは飲み物として例を挙げれば「俺の塩」などといった常人には理解できない物がある。イーといつても武偵をサポートする道具を作つたりもしている。

「ホライゾン、御言、俺が折角かつこよく決めているのにそりゃねーぜ。特に運切、特に

聞いたぜ」と葵は言いながらクネクネと身体を揺らす。

「普段から女装とか馬鹿な言論をしているのが主な原因かと思われませう。端的に言えば普段の行いが悪いということです。トリー様」

「ええ… ホライゾンはセメントだなあ」としよぼくれるどころか更にクネクネし始める。

そんな自分に説教しに来たはずなのに身内で潰し合っている外道を見ていると遠山は馬鹿らしくなってくる。

通偵を遠山は開いてみた。

あさま「遠山君、大丈夫でしょうか？」

十ZO「ふむ、身内が亡くなるというのはさぞ辛いでござろうからなあ。しかも罵倒付きでござるし」

未熟者「まああの事故は可能性事件として処理されているばいから何かあるとは思うんだけどね」

車両兄「あいつのところ行っただけでまるで中学生がエロ本見つかった時みたいなこの世の終わりの顔してたぜ」

頑丈男「キンジの場合、そもそもエロ本買わねえだろうな。勝手に寄ってくるし。あのムツツリめが。後で元気出させるためにエロ本ツアーにでも参加させるか」

怪力女「覚、何馬鹿なこと言ってるのよ。途中までしんみりしてたのに。武藤も余計なことを言わない」

車両兄「ひっ：：。エイプキラー怖い」

怪力女「何か言ったかしら？」

車両兄「滅相もございません」

怪力女「まあ武藤は後で半出雲するとして」

あさま「途中まで真面目だったのにこの空気は：：。そう言えば出雲君、応答がありませんね」

十ZO「ついさつきまで隣にいたでござるが風見殿が突然現れてジャーマン・スープレックス決めた後、格ゲーのようにエアリアルした結果、伸びてるでござる」

副会長「うわあ：：。随分と酷いな」と話の路線が変わっていた。

そんな物を見ていると遠山はいつの間にかしよぼくれているのが馬鹿馬鹿しくなっていた。いつの間にか死んだ目も少し蘇っていた。

ふと自分のご先祖様について考えた。

遠山の金さん。江戸時代の奉行者で、肩の桜の彫り物を見せつけるのが印象に残る人物だ。実際に時代劇でもそのことはよく使われる。

そして悪を成敗するという奉行者としての善を貫いているということだ。

それは武偵にも通じていることではないかと遠山は思った。自分の善を貫いて働く武偵、その善を貫くために命をかける武偵、兄もその善を貫いて武偵として死んだ、または消えたのではないかと。

それなのに自分はどうか。体質、ヒステリアモードの一部が中学ではバレ、使いこなしていないのが原因で特定の女子の偽善の正義の味方をさせられ、そしてその善を貫く前に武偵を辞めようとしている。―それは正しいのか？ いや正しい訳がない。きつとここで辞めたら後悔しか残らないに決まっている。

佐山の言う通り、追ってやろうじゃないか、地を這い、泥を啜りながらも追い続け、俺が思う正義を貫こうじゃないかと遠山は思った。まだそんな正義を見つけていないが。

「あー悔やむのもやめだ、やめ。お前らを見ていたら馬鹿馬鹿しくなった」

そう言いながら遠山は苦笑しながら葵が伸ばす手を掴む。

「よつと」と葵は引つ張るが力が足りないようで引つ張りきることができない。

するとその手を新庄が、ホライゾンが更に引つ張った。

佐山は手が塞がっている新庄の尻を捏ねていた。

一瞬、新庄は手を離し、再びEx―Stで佐山を殴りつける。佐山は顔面から地面に倒れ伏すが、まるでテレビの巻き戻しかのように立ち直り、遠山の手を取る。

そして遠山は立ち、友人たちを見る。

「ほう、さつきとは目が違うな。死んだ目から庶民の目に戻っている」

「それは褒めているつもりなのか？ 佐山」

「褒めているさ、褒めている私に感謝するといい」

「相変わらずだな…… 運切も大変だな」

「うん、それについては完全に同意するよ…… 良かった、一応立ち直れたようだし」

「すまなかつたな」

「別にいいよ。これくらいなら佐山君の相手してる方が軽くマシだから」

「さつきからヤケに鋭い言葉だな運切」

「そ、そんなことないよ。た…… 多分」

「キンジ、通偵見てみろよ」

そんなことを突然、葵に言われる。

「ああ」と遠山は答えると再び通偵を開く。

俺「なんやかんやでキンジ立ち直ったから心配無用だぜ」

副会長「お前が言うのと随分と不安なんだが」

俺「大丈夫だって」

ホラ子「それについては大丈夫かと。トリー様の他に運切様と佐山様が一緒にいるので」

十ZO「頼もしいと言えば頼もしいでござるが、別の意味で不安が漂う面子でござるなあ」

中心男「何を言っているのだね男の方のパシリ忍者、世界の中心の私がいるのだよ？何の心配があるのかね」

銀狼「相変わらずと言いますでしようか…」

ま口神「心配要素って佐山君だけだよね!?？僕入ってないよね!?？」

十ZO「…」

副会長「…」

あさま「…」

銀狼「…」

ま口神「三点リーダーだけ打ち込むとか酷くない☒ 何、僕も不安要素なの？」

十ZO「なんと言うでござるか」

あさま「そのくあれです、あれ、佐山君との化学反応がメルトダウンレベルで不味いだけで…」

ま口神「随分とズバツと言ったよ!?!？」

副会長「話が変わるが新庄、前々から思っていたのだが、通偵名自分で付けたのか？
だつたら…」

ま口神「そんな訳ないに決まってるよ!!? 僕がこういうの苦手だから佐山君にうっかり頼んだからこうなつてたんだよ」

副会長「まあそんなことだとは予想していた」

とまだまだ別の話題が展開されていく。そんな中、遠山は自分の表示枠を開き、通偵を書き込む。

金ツー「心配かけて悪かったな。皆、俺の話題の時に別の話題になつてるのは流石に笑つたが」

十ZO「キンジ殿が復活して良かったでござる」

貧乏忍「師匠が復活して良かった。復活しなかつたらと思つたら…」

副会長「遠山、立ち直つて良かったよ。まあそつちで馬鹿二人が騒いでいるだろうが気にしないでくれ」

俺「馬鹿つて誰だよ」

中心男「いや貴様だろう。他、あと一人となると誰だ?」

副会長「お前だよ!!?」

中心男「何を言う、私は世界で最も聡明な男だ。馬鹿な訳がなからう」

あさま「馬鹿と何とかは紙一重つてよく言いますもんね。佐山君の場合、もはや紙は紙でも濡れた和紙でしょうけど」

ま口神「うわあ……否定できないや」

金ツー「ははは……でもまあこれから俺はあの事故をいや事件を追うことにした。迷つてても仕方ないしな。それでお前らに頼んだり、迷惑をかけるかもしれないが、その時はよろしく頼む」

副会長「今更だ。馬鹿共相手にするよりははずつと楽だからな。まあこつちも迷惑をかけるかもしれないがそれはお互い様ということだ」

十ZO「自分だつてきつと迷惑をかけるでござろうから遠慮なしでいいでござるよ」
貧乏忍「師匠のためならいくらだつて手伝うでござるよ」

あさま「空気が一瞬にして切り替わりましたね」

銀狼「流石はこの巣窟の数少ない良心ですわ」

俺「迷惑？ おう、かける、かける。勿論、俺もかけるけどな」

ホラ子「トリー様は少し自重という言葉を学んでは？ それと反対にキンジ様はもう少し迷惑をかけることを学んではいかがでしょうか？」

金ツー「そうするよ」

と書き終わると表示枠を閉じる。

「さてと、まずはここ数日身体を動かしてなかったから動かすか」

「そうかね、私と新庄君は戻るとしよう。IAIに呼ばれているのでね。さつき男の方

のパシリ忍者を呼んでおいたから好きにするといい。ほらもう来たぞ」

そう佐山が言うといインターホンの音になる。おそらくは佐山が呼んだであろうクロスユナイトであろう。

「助かるよ。トリー、ホライゾン、お前らはどうする?」

「俺はなんも戦闘スキルねえし帰るぜ。丁度浅間神社からの依頼もあるしな。ホライゾンはどうするんだ?」

「私は点蔵様とキンジ様と訓練をしようと思います」

「そうか、助かるよ。じゃあな」

「おう、頑張れよ」

そう言って佐山、新庄、そして葵はドアを開けて出て行く。

そして入れ替わるかのように赤いマフラーで隠した点蔵・クロスユナイトがそこにはいた。

「拙者も協力させてもらおうでござる」

そう言ってクロスユナイトが入ってくると同時に帽子はかぶっていないが、布で顔の一部を隠した少女、風魔・陽菜が天井から現れた。

「いつからいた?」

「ついさっきでござる」

その答えに「そうか」とだけ遠山は軽く答える。

「じゃあ協力して貰うからな。今〆の俺は精々Cランクの上の方がいいところなんだからな」

「目標はどのくらいでござるか？」

そうクロスユナイトに言われる。その問いに対して遠山は今まで向けた中で一番真剣な表情で言った。

「今と同じSランクに決まっている。波があつちやならない。兄さんみたいに、金一兄さんみたいにSランクにいられてやる」

「そうでござるか、では自分、全力で協力させてもらおうでござる」

「某もでござる」

「では、キンジ様、不肖私、ホライゾン・アリアダストも協力させてもらいましょう」

「よろしく頼む」

そう言つて四人は外へと飛び出す。――高みへと至るために。

そうして遠山はその思い出に浸っていると時間が随分と経っていることを思い出す。

「げっ：：もうバスの時間過ぎてるじゃねーか!?、仕方ねえ、自転車に乗つていくか」

そう言つて遠山は思い出に浸りながら調整し終えたキンジスペシャルを手に取り、武偵高校の制服を着用し始める。

着替え終わると玄関に置いておいた自転車の鍵を手に取りドアを開ける。

「さて、行くか」と遠山は言って自分の寮、強襲科の寮から飛び出していった。

現在、遠山・キンジ、東京武偵高校二年強襲科”S”ランク。

第二章 演説せし悪役

Silent night Holy night

静かな夜よ 清し夜よ

Shepherd first see the sight

牧人たるものが初めにこの光景を目にする

Told by angelic Alleluja,

それは天使の歌声 礼賛によって語られる

Sounding everywhere, both near and far

近く 遠く どこまでも響く声で

” Christ the Saviour is here ”

「救い手たる神の子はここに在られる」

” Christ the Saviour is here ”

「救い手たる神の子はここに在られる——」

そう鼻歌ながらも新庄・運切は歌いながら佐山・御言と共に早朝ランニングに来ていた。新庄が先頭で佐山は後ろにいる。

新庄は狙撃科、佐山は尋問科と身体をあまり動かす科ではないが、それでも武偵として身体は鍛えておこうと二人はランニングをしていた。――最も、佐山は新庄といつたためにやっているであろうが。

「ふむ、相変わらず新庄君の尻は素晴らしい物だね」

後ろから佐山はふむふむと勝手に納得しながら腕を組み言った。だがスピードを落とすことなく、息を切らすことなく新庄に付いて行く。

「佐山君はどうしてこうなのかなあ……黙ってればただの凄い人で済むのに」

「ははは、何を今更言っているのかね新庄君、私は元々全生物の中で最も聡明で、世界、いや宇宙の中心な私は凄い人に決まっているじゃないか」

「もう……どうしてこうなんだろ」

新庄は溜息を吐く。もう慣れたことだが、やっぱり佐山はどこか、いや、全てが可笑しい人だと認識するしかなかった。

そうこう話しているうちに切り返し地点にしている浅間神社の分社に着く。それなりの大きさを誇る緋色の鳥居と、何段も存在する石段が目を惹く。

長い長い石段を歩き、そして歩き終わると一人の巫女がそこにはいた。こちらに気づいたようで、こちらに寄ってくる。

「運切、おはようございます」と巫女は言う。

「うん、おはよう浅間さん」

「ふむ、おはよう」と二人は挨拶を返す。

「いつものランニングですか？」

「うん、一応武偵だし、鍛えておいて損はないしね。羞恥心的に思いつきり損してるけど」

「ああ……」と浅間は納得はしたくないが新庄の隣にいる佐山を見て、納得せざるおえなかった。

●画「悪役と運切はもう夫婦漫才を超えたカップルだし漫画のネタの塊にしか見えないわね」

金マル「だよねー〈浅間様が射てる〉並にネタが尽きないし」

ま口神「いつの間にかネタにされているんだと!?」

中心男「ふむ、ではナイト、ナルゼ、後で続刊を全て頂こう。これから新刊も全て私の元を持つてくるように。後、新庄君の絵はま口尻を強調して描くように。勿論無料とは言わん。幾らだ？」

守銭奴「金か？金の話か？金の話だな」

金マル「個人契約だから入り込む余地ないよ」

○ペ屋「えー、うちと契約しようよ、ねえ」

中心男「その金に汚い商人は今すぐ溜め込んだ物全て吐き出して帰れ。今は私が新庄君の成分を補給する手段を増やすところなんだ。邪魔をしないでもらおうか」

守銭奴「なんて酷いことを言うんだ貴様」

●画「じゃああなたの家に郵送しておくわ。これからもネタの提供をよろしく。代金は代引きにしておいたから」

中心男「任せたまえ」

ま口神「ネタの提供はしなくていいの!!?」

あさま「ああ、御言君の頭が地面にめり込んで」

金マル「なんだ。いつものことじゃん」

●画「そうねマルゴツト、いつもことね」

銀狼「地面にめり込むのがいつものことって…私ももう慣れましたけど」

あさま「慣れることが可笑しいのでしようけどね…」

そう通信に書きながらも目の前で起きた惨状に浅間は溜息を吐く。

目の前には神社の境内の地面の部分に頭が刺さった佐山と、佐山の両足を持ってぜえぜえと息を荒げている新庄が目の前にいた。

まだ早朝だということと浅間は思う。だがこれもいつもの、普段の日常の一部なのだ。

遠山が崩れかけてから数ヶ月、浅間のところにも巫女専用の術式しか用意されていない星伽神社と違つて汎用術式、そして神様と契約する上位術式も存在するため、遠山はよく訪れていた。

そのせいか、星伽・白雪には一時期泥棒猫扱いされたことを思い出し、一瞬だが冷や汗をかいた。

日本刀でバツバツと切つた張つたはするわ、機関銃をフルオートで撃つわといくらあの外道共でも通偵でのチャットも阿鼻叫喚と言える有様であつた。

(キンジ君のことはそりゃ好きですよ…友達として)

そうあくまでも友達としてである。この外道ふためくグループで向井・鈴と並ぶ数少ない常識人の一人だ。少し前まで新庄も含まれていたが、段々と毒され、常識人からではないぶ、いや宇宙の彼方まで離れた。

佐山はどうかと聞かれたら常識人から外宇宙の彼方まで行つて、そこから亜高速で離れていく感じであろう。

(それに… まあ巫女として不味いですけど)

きつと浅間は遠山でもなく、勿論佐山でもなく葵のことを気に入っている。だが葵にはホライゾンがいる。それは大変道徳的に不味いのではないかと浅間は思っている。

「ではそろそろ戻るとしよう。我々はバスなどは使わんがそろそろ帰らないと帰りのラ

ンニングの時間と用意の時間を含めても授業時間に間に合わんからな」

と佐山は腕の力で倒立をしながら地面に刺さった自分の頭を引っ張り出し空中でアクロバットな動きをして立つ。

それを見て浅間は「なんて才能の無駄遣い」と思った。

「うん行こうか。じゃあ浅間さん、学校で」

「ええ」

とお互いに別れの挨拶をして佐山と新庄は帰って行った。

時は飛び、場所は人工島に作られた東京武偵高校の体育館、始業式が行われていた。

生徒ほぼ全員が揃い、教務科の人達も揃っている。

「それでは、生徒会会長代理、生徒会副会長、佐山・御言君、よろしく願います」
そう司会に言われると佐山は壇上に立つ。

佐山は自分で自分をかっこいいだとか宇宙で最も聡明だとかいうナルシストの類に分類される人物だが、彼をよく知っている人はこう答えるだろう「そう言える才能、見た目、能力があるからタチが悪いと」

そう佐山は世間でいうイケメンに分類される部類だ。彼を知らない人からすればた

だのかつこいい人なのだ。

だから新一年生などがある始業式などで新一年生からは「あの人かつこいい」などの歓声上がる。――数秒後にはそんな理想は簡単に崩れ去るのだが。

「私が生徒会会長、星伽・白雪の代理で演説をさせてもらう生徒会副会長の佐山・御言だ。代理というのは大変気に食わんことだがまあ置いておくとしよう」

そう言う佐山はネクタイを締め直し、言った。

「改めて言おう。私は宇宙の中心である佐山・御言だ諸君!!? この学校は正直に言つて、馬鹿と馬鹿がひしめく魔窟だ。貴様らのようなひ弱な存在はすぐに淘汰されるかもしれん。だからこそ私は言おう、貴様ら、生き残るといふことを大前提して考えろ、周りに飲み込まれるな、そうして自分自信という存在を自分で認識しろ」

と一旦佐山は口を止める。

新一年生はポカーンとしており、既に佐山を知っている二年生と三年生は「なんだ佐山か」と呆れている。

ちなみに教務科の先生達は「あれと性格さえ治ればまだまともなのに」と言う。さらに言うならば強襲科の教員である蘭豹は腹を抱えて大爆笑しており、佐山が所属する尋問科の綴・梅子は「流石はSランクと言ったところか」と言う。

そして表示枠を開くといつもの外道共がチャットをしていた。

二年の方を見ていると何人か表示枠を開いていることが分かる。あさま「相変わらずですな御言君。」

副会長「あの態度さえさえなければ同じ道を歩く友人として褒められるんだがな」
十ZO「もう今更でござろうよ。あの性格あつて御言殿でござる」

ま口神「ごめんね、うちの佐山君が本当にごめんね」

労働男「そう言えば遠山の奴どうしたんだ？」

労働者「俺も知らないな」

幸雷娘「いないんですの？」

車両兄「そう言えばいないなあいつ」

元兵女「教務科には連絡はきてませんよ。皆さん何か分かりますか？」

十ZO「拙者には分からないでござる」

蘭豹は隣を見ていると遠山のクラスの担任予定の高天原・ゆとりが表示枠を開いていた。

おそらく高天原も生徒達が何人も表示枠を開いているのを見て、開いたのであろう。

貫通女「ようテメエら始業式の最中に何やってんだ？」

車両兄「げえ蘭豹」

貫通女「おい、武藤、私が来て何か悪いか？とりあえず死んどけ」

ま口神「相変わらず強襲科はバイオレンスだあ……」

副会長「ところで蘭豹先生、遠山のこと知りませんか？」

貫通女「こつちにもきてないが、あいつだからうっかり事件に巻き込まれていたりしてな」

副会長「そうですか…… 遠山、表示枠にも反応しなくて」

あさま「うわあ…… 嫌な予感ありありですよ。そう言えばトリー君も見つかからないよ
うですが」

元兵女「弟の方の葵もいねーのか？」

あさま「ええ、今日はよっぽどのがなければ任務は入らない日ですからトリー君
に前聞きましたけど確かCVRの任務も無いって言っていましたよ」

CVR、つまるところはハニートラップを専門とする科であり、所属する条件は美少女
という点の他の科とは一線違う科だ。トリーだが葵・トリーは男子だ。だが彼はCVR
に所属しているのだ。

十ZO「正直、トリー殿の女装はハイレベルでござるから何か任務があつても可笑し
くはないでござろうが、その場合、他の人も必要でござるからなあ」

そう葵・トリーは女装という手段を用いることでCVRに所属している。

葵の女装は術式を用いているからとはいえ、身内すら騙すことが可能なレベルの女装

なのだ。

クロスユナイト曰く「もし自分がSHUDO初段なら寝技に持ち込むレベルでござる」と言う程だ。

そしてハニートラップとは誘い、油断させることが条件のため、相手を驚かすという点では女装というのは強いのだ。

美貌で相手を誘惑し、そして自分の正体を明かすことで動揺させる二重の強さがある。

そんなこともあってか葵・トリーはCVRでAランクを保持している。Sランクを保持してもいいと言う話は出たが、東京武偵高校のCVRのSランクの片割れが女装では示しつかないため、Aランクとなっている。

未熟者「そう言えば葵君に表示枠かけた人いる？」

副会長「私はしていないが…」

あさま「私もです」

十ZO「自分もでござる。まあトリー殿でござるし平気でござろう」

あさま「そうですね」

遠山とはえらい扱いの違う葵であった。

表示枠を開いてチャットをしていることに気がついたのか佐山は此方を指差す」

「見たか？ あれが貴様らの先輩共だ。宇宙の中心に立つ私のありがたい演説を無視し、チャットに勤しむ馬鹿共だ。尊敬することは無駄だと言つてもいいだろう。ーだが安心しろ、私という尊敬すべき存在に尊敬を極振りするといい。そうすればきつとまだまともな武偵になれるだろう。」

後、新庄君は誰にも渡さん!!？、それだけははつきりとしておこう。新庄君を愛でるのは新庄君が可愛く、尊く、新庄君の尻がま口いから仕方がないこととするが触れるのは私だけの特権だ。羨ましいだろう貴様ら、尻神の尻に触れることが」

そう佐山が演説すると、新一年生は目が点となり、二年生と三年生は「知らんがな!!？」と言わんばかりの声があがり、生徒会のメンバーから一人、巨大なメカメカしい砲塔、E x - S t を持った少女が現れる。新庄だ。

「おやどうしたのかね新庄君？ 君の出番は今回、無いはずだがーはっ：。もしや私に尻を撫でさせるために来たのかね？じゃあそうしようか」と佐山が両手を広げて言う。

新庄は「そんなわけないでしょ!!？」と言い、E x - S t で殴りつけ、首を絞め付ける。

「新一年生、ついでに言おう、この魔窟にようこそ。思う存分沈むといい!!？」と佐山は言い、新庄の首絞めに耐え切れず昇天する。

「司会さん、もう終わりでいいから。僕が佐山君引つ張り出すから」

そう新庄は言い、佐山をズルズルと引つ張つて体育館を後にした。

「これで始業式を終わりにします」

そう司会は何事もなかったように閉会の挨拶をする。そう、もうこの司会も慣れて、いや毒されていたのだ。

教室にそれぞれ戻ると二年A組の机に、一人の男子生徒が突つ伏していた。遠山・キンジだった。

「キンジ殿、どうしたでござるか？始業式に来なくて」

「遠山君、何があったんだい？随分と死んでいるようだけど」

とクロスユナイトとネシンバラは言う。

元々遠山は根暗な方だったため、落ち込む時は相当落ち込むのだ。

そうしたら遠山は小声で「アレを使った」と言い、クロスユナイトとネシンバラは「ああ．．．」と言う。そうアレというだけで二人には何が起きたのかなんとなく分かつてしまふのだ。

「遠山君、何があったか話してくれるかい？」

「ああ、わかった．．．」

そう言い、遠山は先ほどまで遭遇していた事件について話し始めた。